アン・リンドバーグの荒野

安井　信子

Anne Lindbergh's Wilderness

Nobuko YASUI

キーワード：庇護，飛行，荒野，自然，永遠

概　　要

チャールズ・リンドバーグの名は今でも知らない人は殆どいないが，彼の妻アン・リンドバーグを知る人は多くない．裕福な親の家から冒険的な人生へと飛び立つと，当時としては珍しく，彼女は飛行士として作家として，夫とともに世界を広く旅行した．人々に対する暖かい心をもちつつも，広大な荒野，大自然の前には人間の住む世界がいかに狭く，いかにはかないかを実感した．飛行が体験させる荒野は人間を超えたもの，永遠のシンボルとなり，束の間の日々を生きる人間がいかに永遠なるものに融合しうるかという，本来の意味で宗教的といえる探求を，彼女は続けていったのである．

はじめに

大西洋単独横断飛行で知られるチャールズ・リンドバーグの妻，アン・リンドバーグ（1907—2001）は，作家としてはそれほど有名ではない．しかし彼女の代表作『海からの贈り物』（1955）は非常に質の高い作品であり，今もずっと読み継がれていて，彼女の自然描写や自然に対する感性に魅了される読者は多い．若い頃から自然を愛していたアンは，結婚後自分も操縦を習い，チャールズと共に冒険的な空の旅行を数多く経験して，世界の様々な自然と接することになった．ここでは最初の作品『北を通って東洋へ』（1935）と三冊の日記を中心に，彼女にとって荒野が何を意味したかを見ていく．視野が広く深い洞察力をもち，不思議に日本的なものを感じさせる彼女の作品から，二十一世紀に生きる私たちが学ぶべきものは多い．

(1)　庇護された世界（sheltered world）

アン・リンドバーグは文化的，経済的に極めて恵まれた環境で育った．父親ドワイト・モローは貧困から身を起こし法律家として成功を収め，国際金融業界で富豪となったばかりか，その手腕と人柄を買われてメキシコ大使に任命され，後に上院議員となるという，まさしく成功物語を地で行った人だった．母親エリザベスはスミス・カレッジ出の勉学熱心な教師で，文才もあり，諸方面で夫を助けたが，当時いかに卓越した女性であったかは後に学長代理までしていることからもうかがえる．トップ・エリートの両親は当然教育熱心であり，四人のわが子に可能な限り最高の教育を与えようとした．親の偉業に負けないよう期待されて，三人の娘は母の母校スミス・カレッジに行き，息子は父と同じくアマースト・カレッジに行った．才色兼備の長女の陰に隠れ，内気で目立たない次女のアンは，親が敷いたレールではなく独自の道を求め，母や姉と違うヴァッサー・カレッジに行きたいと希望したが，聞き入れられなかった．

このような両親に与えられた環境を，後にアンは「小さな町の暖かい，密着した家族の輪の中に，しっかりと保持された，私の庇護された世界（my sheltered world）」（W xiii）と述懐している．それは「安全で裕福で，教養があり，感受性が鋭く，アカデミックで，善良な人々」の「現実世界からほど遠い，囲い込まれた世界」（W96）であり，いわば黄金の鳥かごであった．しかしアンにとって，黄金であろうとなかろうと鳥かごは鳥かごであり，それは彼女の望む現実世界から隔てられ，囲い込まれた状態にほかならなかった．「自分はヴァッサーに行きたい」と切望したのも，「違ったことをしたい．実験したいの．前以てわかっていないこ

（平成14年10月11日受理）
川崎医療短期大学　一般教養
Department of General Education, Kawasaki College of Allied Health Professions

とをやりたいの……みんなの期待に反して新しい所に行ってそこで始めたいの」（B 6 — 7）と心の底で自由を求めていたからである．しかし周囲のプレッシャーは余りに強く，一人で鳥かごを破ることは到底不可能だった．そのとき空からモロー家を急襲してアンを連れ出したのがチャールズ・リンドバーグである．

メキシコ大使モローの提案で，アメリカとメキシコの友好のため，チャールズはメキシコまで飛行し，そこでアンたちと出会った．誘われて初めて乗った飛行機からアンが目にしたのは，「両親が重要で立派だと思うあらゆるものが，小さくて取るに足りないものに見える」光景だった．「私の刺繍とリボンで飾った小さな世界は打ち砕かれた」（A 41）とアンは書いている．自国に戻ったアンは飛行体験が忘れられず，パイロットに依頼して飛行機に乗せてもらい，「この谷は本当はこういうふうだったのね．何て明白，何てシンプル！　こんなに小さな場所，こんなに小さな世界なのね」「すごくリアル！　一人で，私の責任でやったのだから．私が完全に所有している経験だわ」（B 159）と書いている．控えめでおとなしいにもかかわらず，親がお膳立てしてくれる人生ではなく自分の人生を獲得したいと願い，裕福な暮らしに虚偽を感じ取って本当のものを求めていたアンは，モロー家という sheltered world から脱出する用意ができていたのだ．

彼女がその本質を見ぬいたチャールズ・リンドバーグは，「すべての余分を削ぎ落とし，曖昧さがなく……集中して」（B 162）自己の目的に直進する人間で，余りにも交際範囲が広く散漫になりがちなモロー家とは対照的だった．彼は「彼の目とか男の人の目というよりも，その背後に多くの明るい空とくっきりした地平線があるかのような」目をしていた．超有名人であるため地上では自由に行動できないチャールズは，デートの時再びアンを飛行機に誘った．「世界の果てだと思っていた山々」をあっという間に飛行機は飛び越え，アンは「その彼方を見た！……新しい地平線の遠くに雪を頂いた別の山頂がそびえていた．ああ，あの驚嘆すべき静けさ，あの壮麗な氷の不動の山．」（B 233）「自分が何て小さく感じられるのかしら」とアンが言うと「そう，飛行すると本当にそんなふうに感じるよ」（B 223）と答えたチャールズ自身，「じっと座って夕日を見ていられない —— 追いかけてその一部になりたい」（B 245）類の人間だった．アンとチャールズが共に心を奪われていたのは，狭い世界から抜け出ること，「彼方（beyond）に行くこと」，そしてその向こうにあるであろう「静けさ」「不動」であった．結婚に際してアンは友人に「お幸せに，なんて言わないで．幸せになるとは期待していないの，これはなぜかそんなものを越えてる（beyond）のよ．勇気と強さとユーモアのセンスを祈ってちょうだい．私はその全部が必要なの」（B 249）と書き送っているが，彼女の生涯を振り返ると，この予感はいかに的中していたことだろう．「庇護された世界」を「越えて」「彼方」に行くのは当然生易しいことではなかった．

(2)　空から見る荒野

当時としては初めての世界的有名人で，空前絶後の名声に付きまとわれたチャールズ・リンドバーグは，「私より前にそれほど地球の空を移動する自由を手にしたものはいなかった」と後に述懐している．彼はしばしばアンを副操縦士として，誰よりも広く自由に世界を飛び回った．当初「夫婦は一つの場所に数日以上とどまれることは一度もなかった」し，「仕事で旅行して回ることが世界一多いカップル」（L 424— 5）という言葉は誇張ではなかった．『北を通って東洋へ』はその最初の長期旅行（約三ヶ月）—— ワシントンを発ち，カナダ北海岸，アラスカ，カムチャッカ，日本を経て中国に至る旅 —— を描いている．当然ながら1931年の空の旅行は現在とは全く違ったものだった．なにしろ初めて大西洋無着陸横断がなされたのがたった四年前であるから，北回りは全く未踏の領域だった．その上今のように複雑な計器と機械ではなく，勘と技術で飛ぶ当時の飛行士は，自然から遮断されるのではなく自然に晒されるわけで，命にかかわる危険は十分あった．しかし一向に動じないチャールズは既知のルートには興味を持たず，未知の世界に引かれる冒険心はアンも同じだった．危険だと人々に反対されて，アンはきっぱりと「危険だって？　結局私たちは行きたいのだ．いまさら危険のことを話して何になろう」（N 17）と書いている．

もともとゆっくりタイプのアンは，以前にチャールズの運転する車に乗って恐怖に蒼ざめながら，「彼の一つの本質」は「スピードを出して，集中して，嵐の中を容赦なく突き進む」ことであり，「私の全人生がこうなのだ，こんなふうに闇の中をチャールズとともに余りに速く，余りに盲目的に，チャールズを信じて，突進するのだという気がした」（F 43）と書いたことがあったが，ある面ではそのとおりだった．「あの最初の象徴的な彼の飛行は今もって本当だ．彼はいつも，過去

も未来も一人であの洋上にいる，一人で自分の目的地を見る，到達できると一人信じて」(W117) という彼女の言葉は彼の人生の本質を言い当てている．そんな孤高の人生行路に飛び込んで行くほど，庇護された世界から出たいという彼女の願いは強かった．後になって航空技術も進み，安全で快適になった飛行機に乗った時，彼女は「地上は私から切り離されている．まるで映画のように非現実的(unreal)だ．私は窓をどんどん叩きたいような気がした，私を通して……人生に触れさせてと．……それは冒険の問題ではなく，リアリティの問題だ」(W197) と書いているが，これほどに囲いを破り，人生，現実，本物に直接触れたいというアンの欲求は強烈だったのだ．

こうして飛び立った機上から眺める北回り未踏ルートは，「踏み込むことのできない領域」，「今まで誰一人目にしたことのない場所」，「夜の間に降った初雪のように，清々しく，静かで，人の手が触れていない」，「創造の日から不変のまま」(N 7)の光景であった．この空から見る「新しく」，「未知の」，「前人未到の」世界ほどスケールの大きい荒野を眼にした人間はそれまでいない．地上を進むのではなく空を飛ぶため，速度，高度，視界の広さがけた違いである．それは壮大であり恐ろしくもある眺めだ．「延々と続く荒涼とした土地，どこまで行っても同じ．私たちはこの北の地で，時間を超越した永遠の中に凍結されたのだろうか．」「下方の灰色の荒野，月世界のような原野，別の惑星に逃れた亡命者……」(N43—4)，「虚空に当てもなく飛び出した」かのように思われる「不毛の極地」(N51) ……その描写は殆ど宇宙的なスケールの荒野といってよい．その中を小さな単葉機で一組のカップルが，交信を無線だけに頼って進んで行く．これ以上に庇護されない (unsheltered) 世界があるだろうか．

荒野に係わる人は多いが，通常人間と荒野の関係は，一つの荒野を探検するか，開拓し定住することである．しかしアンは一地域に縛り付けられることなく，上空から地球を眺め，様々の荒野に連続して触れた．都市といっても空から見ればほんの一点に過ぎず，地上の殆どは荒野である．飛行して荒野の一地点に着陸するたびに，外側の世界と隔てられ，辺境に置き去りにされたようなそれぞれの土地で人々が逞しく暮らすのを彼女は目撃した．その結果，彼女は様々の自然，様々の暮らしを総合的に見る視点を養うことになった．飛行の最大の魅力についてアンはこう書いている．「地上を我が目ですべて抱擁することには強烈な満足感があった．……すべてをこの目にいちどきに収めることは何という喜びだろう．かつては様々な複雑な世界であった島の各部分が，今空からの包含的な一瞥によってひとまとまりとなり，単純化された．……心の中の混乱を整理し，子供時代の複雑な世界を明瞭化するのは大きな楽しみだった．」(N26) アンにとって飛行とは，一つには「複雑，混乱」を「ひとつにまとめ，明瞭化」して本当の姿を把握することを意味した．「空から見る広い視野 (wide-skied point of view)」(W193) ——それは果てしない荒野を「この目にいちどきに収める」視点でもあった．

(3) 自　　然

ここでアンが人生で経験した自然を調べてみよう．彼女はアメリカ東部でごく普通の親しみやすい自然に接して成長した．長子チャーリーが誘拐殺害されたあの悲惨な事件のあと，身の危険を感じてリンドバーグ一家はイギリスに移り，ロングバーンに落ち着いた．それは，静かに佇むアンのすぐ目の前に小鳥が舞い降りるような，平和で，守られた，調和した美しい自然だった．そこではアメリカのようにマスコミの侵入や大衆の目に晒されることなく，穏和な自然と親しみながら，一家は初めて平穏な日々を送ることができた．「永久的な平和と美の印」としてロングバーンを心からいとおしみつつ，しかし同時にアンは「上空から見たらこの場所は何と小さく見えるだろう」(F54)，「何とちっぽけで……保護されていないことか」(F81) と否応なく感じてしまう．また，空を眺めながら「今日みたいな日は空を見ずにはいられない．本当のドラマ，本当の人生はあそこにある．あそこが今日の本当の姿だ，自由で，制限がなくて．……人は普通の暮らしの中では余りに窮屈になってしまう」(F76) と彼女は日記に書く．身近で平和な自然を愛しつつも，常に空からの視点を忘れることはなく，飛行体験は彼女の中に内在化されていたのである．

広大な自然を愛するチャールズは，フランスの海岸沖のイリエックという島を購入し，改築した家に一家で移り住んだ．「多くの男性が賞揚するシンプルライフは……女性にとっては極度に複雑なのだ」(Fxv) と，水道も電気もない孤島で，暖を取り，料理し，子育てに追われるアンは皮肉を言うが，それでもその野性的な風景には彼女も魅了された．祖国メインの自然を「平和，親しさ，故郷」とすれば，イリエックは「野性，孤絶，未知 (strangeness)」(F236) である．後に彼女

はイギリスのロングバーンとイリエックを次のように比較している.「イギリスに行った時, 私は安全と平和（peace), 物事が同じままであることを望んだ. ……でも私は同じではない. 私は変化する. この完全で平和な, 牛のようなイギリスに私はじっとしていることができない.」(下線部は原文イタリック)「それから私たちはイリエックに行った. 最初は大変だった. ……生活は安定した時計によって動くのではなく, 潮や月や天候で動く……最初は不安だったが, これはちょうど人生のようで, 自分を手放せば完全な安らぎ(peace)を見出すことに私は気づいた. ……それは自分自身の人生の果てしない変化に合っている. 人はもはや人生の本質そのものと争わない.」(W76)ここには同じ peace という言葉が使われているが, 両者は異なる意味を持つ. 前者の馴染んだ自然の peace は保守と保身の平和であり, そこに閉じこもれば人は停滞する可能性がある. 後者の荒々しい野性的な自然の peace は, 人が自我の殻を捨ててより大きな何かに自己を預けた安らぎの平和である.

アンにとって自然は大別して二種類あった. ロングバーンのような身近のこじんまりした自然は, 故郷, 巣, 隠れ家（shelter）であり, 保護, 安全であり, 家族や共同体の集団の一部である. それは時計のように安定した人工のリズムに従う人間世界の内部にある自然だ. 一方イリエックに垣間見られる果てしない荒野は, 人間の方が「潮, 月, 天候」に左右され, 荒々しい大自然に晒される所だ. それは広大で限りなく, 自由かつ危険であり, 剝き出しで, 自己と無限の間に入るものは何もない. それをさらに拡張すれば, 大空, 飛行, そして俯瞰する地表となる. 前代未聞の大飛行の旅を重ね, 地球的規模の荒野を見てしまったアンは, 居住地域の自然がどんなに美しくても, 空から見ればいかに小さく取るに足りないか, いかにはかないものであるかおのずとわかってしまう. かといって, 彼女は身近な自然を否定するわけでは勿論ない. ある日山腹から松の木立ちに縁取られた海の風景を眺めていたとき, 彼女は遠景と近景がともにあって初めて景色が精彩溢れるものになることを発見する.「『近く』と『遠く』のすばらしい組み合わせ」に気づいた彼女は,「枠組がいかに重要であるか」（F108)を考える.「遠いものを縁取る枠となる近くのもの」は必要不可欠の要素なのだ. 生来アンは身近な自然に対して感性が豊かで, 家や庭の世話, 家事など細心の注意をもって大切にする性質だった. しかし夫に同伴する大旅行で体験してしまった以上, 荒野がなければ息が詰まるような窮屈さを覚えるのだった.

この二つの要素をアンは充分自覚していた.「飛行という魔法には常に裏階段が必要だ……裏階段は恐ろしく重要なのだ」（Nix）と彼女は『北を通って東洋へ』の前書きに書いている.「鳥のように自由だ」と人は言うが, その自由がどんなに物理的法則と周到な用意に支えられているかを飛行士は知っている. 操縦と無線の技術修得は勿論, どれだけの燃料でどこまで行けるかという計算だけでなく, 事故や不時着の場合に備えてパラシュート, 無線機, 防寒服, 食糧等々事細かな品目を, 限られた重量以内で考え抜いて準備しなければならない. 何かが足りなければそのまま死に直結するのである. 飛行機が飛び立つには飛行場が要るし, 荒野を展望するには基地が要る. 大旅行には生活の安全拠点が必要で, 生活にはくつろげる自然が必要である. こうした舞台裏の地道な努力について彼女は熟知していたが, そうまでしても飛び立ちたい荒野の魅力は抗し難いものがあった.

現在私たちが旅客機で移動することは「魔法」でも何でもなく, 日常茶飯事にすぎない. 外界と遮断された安全な機体の中に座っていれば眠っていても目的地に着いてしまうし, 小さい窓から見える景色は, ビデオの映像のようにただ目に映るだけで私たちとは関係がない. 昔私はペルーのナスカ砂漠の上空を数人乗りのセスナで飛んだことがあるが, 大地から飛び立ち, 空中を飛ぶ強烈な実感と, 地表面が無言で諸々のメッセージを放っているかのような感覚が極めて印象的だった. 帰国後しばらくは車を運転するたびに, どこまで走ろうとも二次元, つまり平面上にすぎないことを痛感させられて, 軽飛行機体験の影響に驚いた. ましてアンは単葉機の操縦士として, 夫と長年地球狭しと飛びまわったのだ. このように自らの腕で身体ごと飛行するとき,「人は自然の一部になる」,「色々な活動の中でも最新, 最先端のものである飛行によって, 人が再び大自然（the elements）と密接に触れ, 大自然に懐かれるとは不思議なことだ」（F493),「飛行は人を大自然から引き離すのではなく, 人を大自然の中に浸す」（W24)とアンは実感する. 幼い我が子たちと平穏に暮らす家庭的な自然と, 抗しがたく引きつけられる荒々しい大自然（the elements), この二つの自然をどうすれば人生において調和させることができるか, それが彼女の大きな課題だったのである.

(4) 永　　遠

飛行がアンに体験させた大自然とは，本質的に何だったのだろうか．「空は世界のどこに行っても同じだ，下界がどんなに変化しても」（F82）とアンは言う．下界の変化を超えた，人間の管轄外にある大空から地上を見ると，山や川など主要な自然が永続的なもので，それにこびりついた町や村は吹けば飛ぶようなはかないものに見える．そのことは野性的な自然，荒野において最もはっきりと実感できる．例えばチャールズとともにアルプスの山々を目にした時，「清澄な陽光と輝く青色の中に聳え立ち……目眩がするほど高い」山は「余りにも巨大で，純粋で，この世のものとも思われず，」（F132）想像を絶する大きさに彼女はただ謙虚に感じるばかりだった．そのとき天候が悪化して危険に直面するが，無私非情の大自然を目前にしたためか，「死ぬことは気にならない．……いい人生だった」（F135）と，いざという時の覚悟さえできていた．エジプトの上を飛んだ時は，巨大なナイル河と緑野の大自然の足元で，あらゆる人工物は「取るに足りない，長続きしない，一時的な，重要でない」（F146）ものだということが明瞭に見て取れた．こうして大自然，空，荒野は彼女にとって，はかない人間を圧倒するもの，「永遠」の表象となった．

日常生活においても彼女は若い時から，時間を忘れさせる，時を超えたものに心を引かれる傾向があった．例えば「花瓶に生けた花は……自己充足している，それだけで全き，完全な存在だ．花々にはいつも落ち着き，完成，達成，完全がある．私にはそんな瞬間は時々しかない」（B77）と言い，バッハを聞いて「絶対的な完全．それが永続しないことは問題ではない．こんな完全なものがあると知っているだけで生きる甲斐があるというもの．人は完璧な安らぎを感じることができる」（B85）と書いている．「完全」とは永遠が顔をのぞかせる一こまと言えよう．もし人がその一こま一こまに自分を委ね，「あるがままの瞬間瞬間に自分を完全に明け渡すならば，人生はどんなに豊かになることだろう」（B120）と，アンならずとも誰しも思う．しかし花にも音楽にもなれない生身の人間は，時間に左右され，時間に幽閉される．彼女は愛読するリルケの言葉，「私たちは局在的で束の間の存在だが，一瞬たりとも時間の世界に満足できず，その中に限定されない．……はかなさは至る所で深い存在に飛びこんでいる」（F115）を引用しているが，飛行以外に時間を超えた「深い存在」に飛びこませ，永遠に触れさせるものに，美と芸術があった．

北回りの航路で日本を訪れた時，アンは日本画を見せられて感銘を受け，その本質を鋭く洞察している．

> キャンバスの左側に，雨にぬれて羽毛を立てた鳥と，花の咲いた雑草が二，三本．あとは余白だ．何もないのだが空っぽではなかった．空間が充満していて，逆説的だがそれがこの絵で最も重要な部分だと感じた．……空間に洗われて（washed in space），鳥と草は生き生きと際立っている．静けさの光輪に包まれて．多分これが日本人が自然の中のものを見る見方なのだ，いつも静けさの光輪に包まれている，だからいつも美しいのだ．（N105）

「空間に洗われ」，「静けさの光輪に包まれる」とは，個々のものが無限の背景，永遠の中で，その本来の美を現しているということだ．それは日本語で言うところの「空（くう）」に通じる．アンがしばしば使う「無私の」，「超然とした」という語も，彼女なりの「空（くう）」を形容する言葉である．中国の上空を飛んで，円い湖の真ん中の小島に立っている「世界で最も美しいパゴダ」を見かけたときの，「台座に収まった宝石のように，究極と安らぎの言いようのない感じがした．……静寂に囲まれてパゴダはあった．単独で，静寂に囲まれているものは美しいのだ」（N125）という記述にも共通したものがある．「空（くう）」に触れたもの，その周りに永遠を輝かせているものは，そのもの本来の在り方をしているから美しいのだ．

ところで「空間に洗われる」と言えばまさに文字どおりアンの時代の飛行を思わせる．隠れたり寄りかかったりするものを何一つもたず，飛行士は空間に身を晒す．命を懸け，薄板一枚の下は死という，全く自分の思いどおりにならない自然に己を晒す．これは野性の大自然の中に入っていく場合にも言える．管理も予測もできず，何が起こるかわからない，絶対にこちらの思いどおりにならないもの，完全に野性的なもの，それを象徴的に＜荒野＞と呼ぶならば，大自然も死も永遠も＜荒野＞と言える．＜荒野＞に直面する時人は否応なく，「おまえは何なのか，おまえの存在はどういう意味か，今の自己を手放す用意はできているか」と問われ，極限の自己発見を，無私，無心の領域へ踏み出すことを迫られる．表面には現れないにせよ，そのプロセスを既に経て描きあげられたもの，それがアンの

見た「空間に洗われ」「静けさの光輪に包まれた」— 余白に囲まれた鳥と草の絵だった．その日本画は，＜荒野＞に自分を預け得た永遠の静謐を現していたのだ．中国の美しいパゴダが「究極と安らぎ」を感じさせたのもうなずける．

アンが飛行や荒野に引かれたのは，この＜荒野＞を身に帯びて生き，永遠なるものに到達したかったからだ．「庇護された世界」から脱出し，何度もひるむ自分を励まして，フロリダの原生林を旅行した時書いたように，「服のように船や飛行機を着て，その殻の外に大洋全部，大空全部を生活空間として持つ」（W169）ことを望んだのはそのためだった．「飛行とは，穏やかな聖母像の前に立ったり，静かな聖歌の合唱を聞く時に経験するものとよく似た魔法だ」（N137），「飛行はざわめく波の下の静謐な世界を見つめる，あの視点を与えてくれる」（N138）という結末部の文は，飛行によって触れうる＜荒野＞が，殆ど宗教的な静謐に近い要素をもっていたことを示している．広大な自然の中で，自我の殻（shelter）を捨て素裸となり，オープンで無防備で，頭を垂れて一人佇む —— 永遠なるものに融合するために．それこそ彼女が心の内奥で求めていたものであった．

おわりに

内向的でおとなしいアンは何事につけても控えめで，受身の姿勢を取るのが常だった．娘時代は親からプレッシャーを受け，結婚後はマスコミと大衆の注目の侵略を受け，また鋼鉄のように強い夫に圧迫された．そのためいっそう切実に，「永遠の中で静寂に囲まれている本来の自己」を求めたに違いない．「庇護された世界」から脱出し，飛行し，荒野に触れることによって，永遠なるものの希求は彼女の生きる意味そのものとなった．どのように二つの自然を調和させ，＜荒野＞に向かうか，いかに永遠なるものへと進んでいくか．それをアンはチャールズのよき妻，五人の子供の母，作家として，現実生活の中で探求し続け，後に『海からの贈り物』を書いた．二十世紀の物質偏重文明が見直しを迫られ，環境と自然保護の問題が深刻となった今，野性を通して人は永遠なるものを与えられると語るアンの探求は，根源から一筋の光を投げかけてくれる．

（注）（　）内のアルファベットは次の作品を，数字は各著書の引用の頁を示す．

文　　献

1）W—Lindbergh AM：War Within and Without, New York：Harcourt Brace & Company, 1995.
2）B—Lindbergh AM：Bring Me a Unicorn, New York：Harcourt Brace & Company, 1993.
3）A—Hertog S：Anne Morrow Lindbergh：Her Life, New York：Anchor Books, 1999.
4）L—スコット・バーグ：リンドバーグ — 空から来た男，東京：角川書店，2002.
5）N—Lindbergh AM：North to the Orient, New York：Harcourt Brace Jovanovich, Publishers, 1963.
6）F—Lindbergh AM：The Flower and the Nettle, New York：Harcourt Brace & Company, 1994.